

先輩社員に聞く電気工事の魅力



照明が点灯した時はすべての苦勞が報われる

内山浩志

扶桑電機株式会社

2010年3月卒業 同年4月入社

出身校 湘南工科大学・工学部電気電子工学科

――どのような就職活動を行ったのでしょうか？

内山 大学で開催されていた合同企業説明会に参加して、複数の企業の会社説明を受けました。そこで初めて電気工事会社の存在を知り、興味を持ちました。電気工事業に関しては、まったく理解していなかったわけなのですが企業説明会に参加したことで、企業を選ぶ際の視点や選択肢に幅が生まれ、理解が深まったと思います。

――どのような経緯で扶桑電機を知ったのでしょうか？

内山 最初は就職課からの紹介でした。そこで、担当者から扶桑電機の説明を受け、自分自身でもホームページなどを見て調べ、その後、企業説明会に参加しました。

――入社の決め手はどこにあったのでしょうか？

内山 これは感覚的なものになってしまうのですが、採用担当者の印象や社内の雰囲気です。その印象を頭に描いて、自分が扶桑電機で働くことをイメージできたことは、大きな決め手になったと思います。もう一つは、現場を担当されている方たちが社内ほとんどいなかったことです。それだけ、忙しいだろうなと感じましたし、受注環境も安定していると思いました。

――現場代理人に求められるコミュニケーション能力について、不安はありましたか？

内山 現場で働く方たちのほとんどが年上ですし、性格もさまざまなので、私も当初は話しかけることに対して、躊躇してしまう気持ちがありました。でも、一言でもいいからとにかく話しかけることです。当時、長い時間話そうとするからあれこれ考えてしまうのだと自己分析し、とにかく挨拶程度でも構わないから、自分から積極的に話しかけようと思ったことを覚えています。

実際に話してみると、意外と会話が成立することも多かったですし、そうした状況になれば、相手から話しか

けてくることも多くなり、情報交換できる材料が増えてくるので、意識しなくても自然と会話が弾むようになります。

――現場に携わる人たちとのコミュニケーションを怠ると、弊害が生まれるのでしょうか？

内山 現場ではいろいろな職種の人たちが働いているので、自分たちの仕事に支障が出ることはもちろんですが、現場に関わるさまざまな方たちに迷惑を掛けてしまうことがもっとも大きな弊害だと思います。建設現場では電気工事業以外にも数多くの職種が関わっており、その関係性は密接につながっているので、何か問題が起こった際に自分自身が責任を取ればそれで済むというケースはほとんどありません。

――大型現場は苦勞が多いのでしょうか？

内山 図面の内容も違ってきます。大型現場になると決まり事が多くなるので、それに合わせた図面を描いて、内容が正しいかどうかを確認しなければなりません。

大型現場には複数の業種の方が何社も入っているのですが、人それぞれによって作業方法や工程が異なるケースが多いことから、全体的に管理する必要性が出てきます。こなすべき仕事が多くなるので、効率的かつ正確な作業が求められると思います。

――仕事をしている中で、やりがいや達成感を感じるのはどのような時ですか？

内山 照明が点灯した時ですね。時には精神的、肉体的に辛いと感じることもありますが、照明が点灯して、施主様から「ありがとう」と言われた時には、すべての苦勞が報われたと感じます。何度経験してもこの気持ちは同じで、初めて担当した現場で明かりが点いた時と同様の新鮮な感動を味わうことができます。